

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

取材のキッカケはマリアナ海難であった。台風二九号をマリアナ群島アグリカン島に避けた静岡県のカツオ・マグロ漁船七隻が沈没、死者・不明二〇九人、日本の漁船遭難の記録としては最大の被害であった。

## 「はやぶさ丸解体」取材

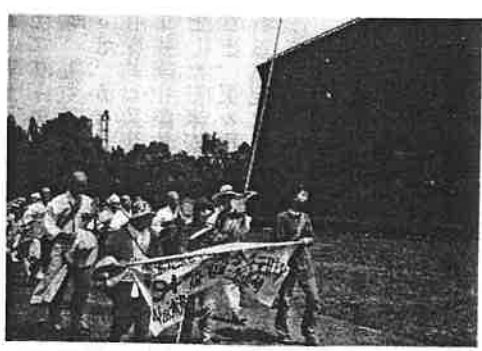
米田伸

二年近く経った。昭和四二年六月、中国が水爆実験に成功したというニュースが世界を駆けめぐった。米・英・ソに続き四番目の水爆保有国になったのである。その前年に行われた中国の核実験では、新潟や東京で放射性巨大粒子が検出されたりして大きく報道されていた。

たのを覚えている。数人の作業員が槌やハンマーを振っていた。船の外見はそのままだったが金属類や真鍮めいた内部の金具などはもう大半が取りはずされていた。操舵室の舵輪はまだ残っていた。

政治学が必要だと、説いている点に、戦前の歴史教育をうけた私はとても新鮮な感銘をうけました。この本を読み終えた時に、第五福竜丸事件が起こりました。

が生まれ、杉の子もその仲間入りをしました。早速日本政府に訴えるために署名運動が始まりました。杉の子のメンバーは殆どが生まれ始めての経験でしたが、一生懸命に活動に行動していらっしやうた杉子の婦人団体の方達は個別訪問され、実験のおそろしさや平和の大切さを話合って署名をお願いして歩いていらっしやうた。



展示館前から出発する日本山妙法寺の平和祈念行脚

イギリスのテレビ局取材  
四月二十三日、イギリスBBC放送の取材が行なわれ、第五福竜丸乗組員の池田正穂さんと大石又七さんが展示館で体験を語りました。BBCが二十世紀の歴史の出来事を三十近いテーマで構成するドキュメンタリー「ピープルズ・センチuries」の第十四作で、題名は「フォールアウト」。広島・長崎の被爆から第五福竜丸の被ばくへとたどり、各地の核実験被害の実態を告発しつつ、死の灰による人類絶滅の危機を描くという意欲作とか。撮影は夕方から船の甲板で行なわれ、静まり暗くなった

館内に第五福竜丸を浮き上がらせて池田、大石氏それぞれ一時間余プロデュースのチャールズ・ブルノーさんのインタビューを受けました。

平和行進出発  
五月七日、核兵器廃絶、被爆者援護等の課題をかねて、一九九四年国民平和行進(同実行委員会主催)が第五福竜丸展示館前で出発集会を開き、広島へ向かいました。また、八日には日本生協連の平和行進、日本山妙法寺の平和祈念行脚も展示館前で集会を開き、広島へ向け出発しました。



第五福竜丸展示館で語る島原スミさん (1994年3月17日)

私は昭和十八年春、夫の転勤で神戸から東京の麻布に引越してきました。その年の暮に夫が召集されましたので、麻布から荻窪に移り住みました。当時の荻窪は学

ビキニ事件にかかわった三人の女性の証言——第一回  
読書会も署名も生まれて  
はじめての経験でした：

杉の子会 島原スミさん

者や文化人、退役軍人、余生を送るかつての会社員等が住む静かな町で、水のとてもおいしいところでした。幸い、震災には会わずに終戦をむかえることができました。

長い戦争から解放されたよるごひは、又格別でした。問もなく、戦争放棄を宣言した平和憲法が制定され、これからの日本は文化国家として生まれ変わるのだと信じていました。当時はまだ、きびしい占領下で、衣食住もままならぬ苦しい毎日でしたが、明るい未来が約束される事を信じ、明日への夢を画きながら暮らしていました。ところが、その頃の世界情勢は、米、ソの対立がはげしくなり、



署名をすすめる島原さん (1954年)

遂に朝鮮戦争が起こり米軍基地としての日本の役割が強化され、当時、私共庶民の一番待ちのぞんでいた、かつての交戦国との全面講和条約は実現せず、アメリカとの単独講和条約、中、ソを仮想敵国とした日米安保条約が締結されるなど、又々再軍備への道が進められる気配に私共は非常な不安を感じました。ちょうどその頃、法政大学教授の安井郁先生は、杉並公民館の館長として、地域の平和運動に献身的なお力を注いでいらつしやいました。大きな集会は勿論のこと、どんな小さい平和集会、PTAの集りにも、杉並だけでなく三鷹あたりまでお気軽にお出かけになり国際法学者の立場から平和の問題をお話下さいました。私も息子にすすめられて、一緒に小学校の教室で開かれた夜の平和集会出现し、日米安保条約に関するお話を感銘ふかく伺いました。そして、その時以来、先生御夫妻とお近づきにさせていただきました。それぞれの場で、先生のお話を聞いた主婦たちは、真剣に平和問題を考えるようになり、再びあのくさくさした戦争体験はしたくない、子供を戦場へおくる過ちを犯してはならないという主婦達の声

水爆ブラボー実験から四〇年目の事実(一)  
死の灰はマーシャル諸島の  
ほぼ全域に及んだ

豊崎博光



水爆ブラボのクレーター

「実験の六時間前に風がロンゲラップ島に向かって吹いていたことを知っていたのに、なぜ実験を行ったのだろうか。六時間あれば私たち全員を避難させることができたし、死の灰をあげせられることもなかったと思う。」

二月二十四日、ワシントンで開かれた米議会の公聴会で、アメリカが、風がロンゲラップ島の方向に吹いていたことを知りながら水爆ブラボー実験を行ったことを認めたとニューズが伝えられた時、ロンゲラップ島の被曝者のひとりアイゼン・テマ(四十二歳)は顔を曇らせていった。アメリカはこれまで、ロンゲラップ島とウトリック島の住民が水爆ブラボーの死の灰をあげたのは、爆発直後に突然風向きが変わったからという「事故説」を主張してきた。しかしこれが事実でないことは、八〇年代前半に公表した機密解除文書に書かれていた。さらにアメリカは、マーシャル諸島におけるすべての核実験の詳細やマーシャル諸島の島じまへの影響などの文書も機密を解除し公表していた。公表はひっそりと行われたため一般的にはほとんど知られず、

公表文書の全容が判明したのは最近になってからである。まず、ビキニとエニウエトク環礁で一九四六年から五八年まで行われた核実験の回数は総計六十七回(従来は六十六回)で、うち水爆実験は十七回(同、三回)。合計の爆発威力は広島型原爆に換算して七千発以上にのぼるものであった。またアメリカは、マーシャル諸島で核実験の影響を受けたのは実験場とされたビキニ、エニウエトク環礁と水爆ブラボー実験の死の灰をあげせられたロンゲラップ島とウトリック島の四島だけであるといってきた。しかし公表した文書では、水爆ブラボー実験の死の灰は西隣のミクロネシア連邦のコスラエ島とポンペイ島を含めマーシャル諸島のほぼ全域の島じまに及んだことを認めている。とくに注目されるのは、ロンゲラップ島は水爆ブラボー実験前に二回とその後に五回、ウトリック島はブラボー実験前に一回とその後に一回核実験の死の灰にみまわれ、両島の住民は何度も被曝させられていた。

にあたる今年の一月までに、ロンゲラップ島被曝者八十六人(胎内被曝者四人)のうちすでに三一人が、またウトリック島の被曝者百六十六人(胎内被曝者九人)のうち七十六人がガンなどで亡くなっている。ロンゲラップ島の人は一九八五年、残留する死の灰から逃れるために故郷の島を離れクワジェレン環礁北西端のメジャト島に移住したが、いまなおガンや甲状腺の病気に苦しめられている。ウトリック島には現在約四百人の人々が住んでおり、人々の間ではロンゲラップ島の人々と同様にガンや甲状腺の病気が多く見られるという。核実験が終了してから三十八年、水爆ブラボー実験から四〇年目を迎えたマーシャル諸島だが、人々の間にはいまなおガンや甲状腺の病気の発病が絶えず、それらは核実験の死の灰の影響によるものと人々は信じている。アメリカがマーシャル諸島の島じまへの核実験の影響を認めたことは、マーシャル諸島の人々に様々な波紋をよんでいる。(フォトジャーナリスト)